

巻頭の言葉

今年には世界に大きな影響をもたらす問題が多発した。最大はロシアのウクライナへの侵攻だろう。それに伴うロシアへの制裁、ウクライナの農産物輸出停滞と食糧危機、ロシアによる西欧諸国への天然ガス供給削減・停止、核不拡散条約再検討会議の決裂、東部4州のロシア併合など多くの問題が、国際社会を混迷させている。ウクライナから日本へ避難している人たちには、一日も早く国へ戻れる日が来るよう祈念している。

新型コロナウイルス問題では、発生から3年近く経つが、一向に収束の気配がない。今年には年明けから感染者増で第6波となり、5月頃から減少したが、7月には再び急増に転じ、第7波は8月中旬に過去最高の日26万人を超えた。政府が経済活動への影響を考慮して、制限を緩めたこともあり、感染者急増で各地の医療現場がひっ迫して大混乱になった。

大学もコロナ禍には苦心の日が続いている。授業は原則対面で行っているが、感染が広がると学生の登校が減り、多くの教員はオンライン授業を併用している。授業を行う教員も、受講する学生も大変な苦勞である。

国立公園研究所の活動は、コロナ前のように進められなかったが、3月に「クマと人のつきあい方をいま考えよう～あつれきを最小化するための対策とは」をテーマに、オンラインによるシンポジウムを開催した。全国から150名を超える参加者があり、クマ問題の関心の高さが示された。国立公園研究所の啓発活動として、駒木学習センターと共同で開催していた公開講座は、コロナ禍で2年間開けなかったが、今年9月に宮地信良客員研究員が「植物の生き方に学ぶ」を開催した。また、11月の大学祭(駒木祭)は、3年ぶりのキャンパスでの対面とオンラインの両方を取り入れた開催となり、国立公園研究所は国立公園の映像にピアノ、バイオリン、チェロのコンサートを組み合わせた「国立公園映像コンサート」のオンライン・プログラムで参加した。

研究活動に関しては、この年次報告に成果を掲載した。年次報告第7号は、論文・論説・研究報告として「大学生の環境学習プログラムづくりを通じた環境保全活動のテーマの関心度と企画立案内容の特徴に関する考察」、「上高地における木製公園施設の再整備について」、「国立公園における情報提供システムの方向性と課題について—上高地集団施設地区中心部を事例として—」、「現地報告 奥日光・尾瀬における歩くガイドツアーの現状—特に高齢参加者の増加に着目して—」、「南米初の国立公園はなぜウルグアイで?～フランクリン・デラノ・ルーズベルト国立公園成立の背景～」、「韓国北漢山国立公園の周回歩道「北漢山トゥルレキル」に関する考察」の6編、国立公園の専門誌「国立公園」に連載している「江戸川大学国立公園研究所から」の記事10編などを中心に編集した。

新型コロナウイルス感染が収束しない影響を受けながらも、1年間の活動をまとめた年次報告第7号を刊行することができた。この年次報告で、国立公園研究所の活動状況をご理解いただくことができれば幸甚である。

2022年12月

国立公園研究所年次報告編集委員長

油井 正昭